

数理最適化から機械学習へのアプローチ

武田 朗子 数理・推論研究系 教授

- 数理最適化とは「与えられた制約の下で、よりよい目的を達成するための数理最適化問題」

$$\min f(x)$$

$$\text{s.t. } g_i(x) \leq 0, i = 1, \dots, r$$

に定式化してそれを解く計算手順までを含めて呼ぶ。

- 機械学習の分野では、データから規則性やパターンを発見するため、しばしば数理最適化法が用いられる。

ex) 二値判別問題

データ $x_i \in \mathbb{R}^n, y_i \in \{+1, -1\} (i = 1, 2, \dots, m)$

から予測誤差 $\Pr(h(X) \neq Y)$ ができるべく小さくなるように、

判別関数 $h(X) = X^T w^* + b^*$ を定める。

最近の数理最適化法がどのように機械学習に使われるか、いくつかの例を挙げて紹介する

【研究1: ロバスト最適化法の二値判別への適用】

様々な二値判別モデルに対して、ロバスト最適化による統一的な定式化(UCM)を与えた。

max-min型の定式化により
データの変動に頑健な解が得られる

$$\max_{\|w\|^2=1} \min_{x_+ \in U_+, x_- \in U_-} (x_+ - x_-)^T w$$

集合の境界

$$\min_x \|x\|^2 \text{ s.t. } x \in \text{bd}(U_+ \ominus U_-) \dots (\text{UCM})$$

Briec ('97)の双対性

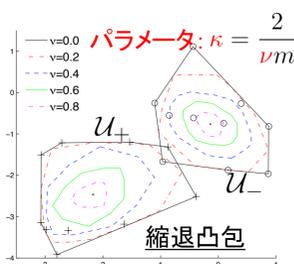
- x_+, x_- : 各クラスの平均ベクトル (真の分布が未知なので不確定)
- U_+, U_- : 有界閉凸集合 (x_+, x_- の動きうる範囲)
- $U_+ \ominus U_- := \{x_+ - x_- : x_+ \in U_+, x_- \in U_-\}$: U_\pm のMinkovski差
- b^* : $h(X) = 0$ が最適解 x_+, x_- の中点を通るように設定
- 2つの集合 U_+, U_- が交わる \rightarrow (UCM)は非凸最適化問題
交わらない \rightarrow 凸最適化問題

- 様々な二値判別モデルの差異は $U_+ \ominus U_-$ にある

ex.1) 楕円: $U_\pm = \{\bar{x}_\pm + \Sigma_\pm^{1/2} \lambda : \|\lambda\| \leq \kappa\}$

ex.2) 縮退凸包:

$$U_\pm = \left\{ \sum_{i \in M_\pm} \lambda_i x_i : e^T \lambda = 1, 0 \leq \lambda \leq \kappa e \right\}$$

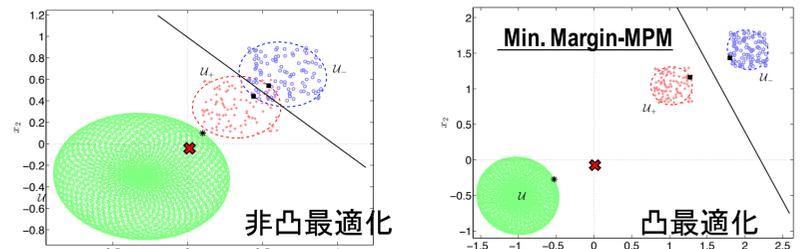


《非凸最適化が必要となる状況》

- パラメータ κ が大きい $\rightarrow U_+, U_-$ が交わる \rightarrow (UCM)は非凸最適化
- 多くの既存モデルは、集合が交わらない範囲内に κ をとる。しかし、

*各クラスの平均ベクトルが近い & クラス間のデータ数に偏り \rightarrow 交わらないような κ の範囲はとても小さい (範囲のない場合も)

*パラメータの範囲を広げると、よい判別関数が得られる可能性 \uparrow



U_+, U_-	交わりあり	接する	交わりなし
$U_+ \ominus U_-$ 楕円	非凸FLD	Fisher Linear Discriminant (FLD)	Sparse Feature Selection Bhattacharyya ('04)
U_+, U_- 楕円	非凸MPM	Minimax Prob. Machine Lanckriet et al. ('02)	Min. Margin-MPM Nath&Bhattacharyya ('07)
U_+, U_- 縮退凸包	Ev-SVM Perez-Cruz + ('03)	ν -SVM (= C-SVM) Scholkopf et al. ('00)	Hard Margin SVM Boser et al. ('92)
U_+, U_- 凸包	—	—	—

研究2: 非凸最適化の厳密解法

研究3: 凸最適化の汎用解法

【研究2: 非凸FLDのための非凸2次最適化】

非凸FLD ($U_+ \ominus U_-$: 原点を含む楕円) を非凸最適化問題に変形:

$$\min_x \|x\|^2 \text{ s.t. } (x - c)^T A^{-1} (x - c) = \kappa^2$$

(ただし, $A := \Sigma_+ + \Sigma_-, c := \bar{x}_+ - \bar{x}_-$).

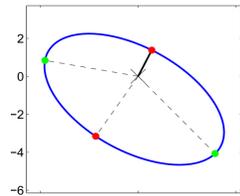
- 最適解はKKT条件: $\left. \begin{aligned} Ax &= \lambda(x - c) \\ (x - c)^T A^{-1} (x - c) &= \kappa^2 \end{aligned} \right\} \dots (\text{KKT})$

を満たすから, (KKT) を満たす (x, λ) を列挙すればよい。

- $\det M(\lambda) = 0$ を解けば, λ が得られ, (KKT) から x が得られる。

一般化固有値計算を利用した解法 (計算量: $O(n^3)$)

$$\text{ただし, } M(s) = \begin{bmatrix} \kappa^2 & O & c^T \\ O & -A & sI - A \\ c & sI - A & O \end{bmatrix}$$

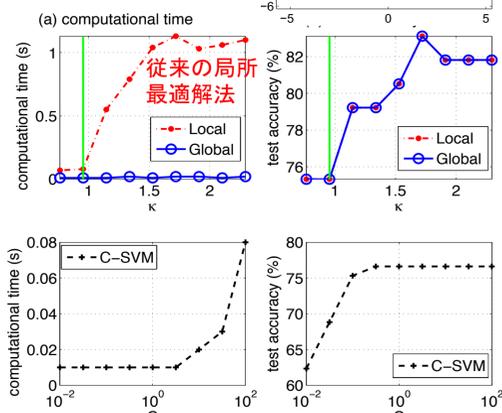


- 非凸MPM (2次等式制約が二本の非凸2次最適化モデル) に同様の解法 (計算量: $O(n^6)$)

- より一般のCDT問題 (多項式時間解法の有無は最近まで未解決。実装可能な解法はない) に対して、

$O(n^6)$ の解法を構築。

最初の実装可能な多項式時間解法



【研究3: 加速近接勾配法に基づく二値判別の汎用解法】

二値判別モデルの統一的な定式化(UCM)に対して汎用解法を提案した。様々な判別モデルを同じプラットフォームで試すことが可能となり、データセットに応じて適切なモデルを選べる。また、汎用解法は個々の既存解法に比べても高速である。

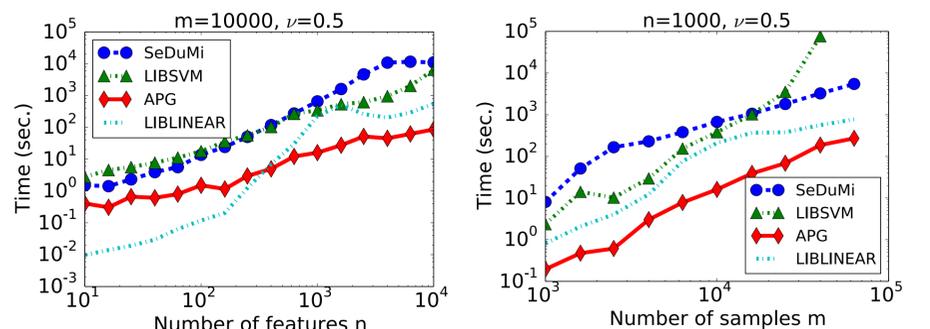
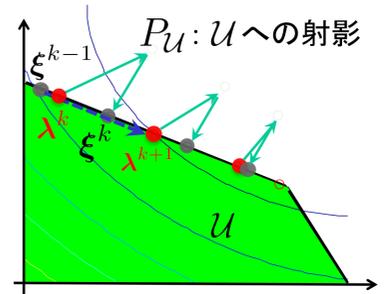
加速近接勾配法 (APG) (Beck & Teboulle, '09) + 高速化テクニック

$$\text{Step 1. } \xi^k = P_U \left(\lambda^k - \frac{1}{L} \nabla f(\lambda^k) \right).$$

$$\text{Step 2. } t_{k+1} = \frac{1 + \sqrt{1 + 4t_k^2}}{2}.$$

$$\text{Step 3. } \lambda^{k+1} = \xi^k + \frac{t_k - 1}{t_{k+1}} (\xi^k - \xi^{k-1}).$$

慣性



人工データに対する計算時間 (SVM)